

主の降誕 夜半のミサ

ルカ 2・1-14

2017.12.24 高円寺教会 21:00 ミサ
クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

教会で聖劇をするために子どもたちがそれぞれの役割をもらうことになりました。「あなたはマリア様をやってね」、「あなたは天使ガブリエル」、「君はヨセフ様の役」、「ナレーターは…」。その中に一人、台詞を覚えるのが苦手なダウン症の子どもがいました。先生はその子に宿屋さんをお願いしました。そして台詞は一つだけ、『「ここはいっぱい。あっちに行って』、これを覚えてくださいね』とお願いをしました。

何度か練習をやって、とうとう聖劇の本番がやってきました。やがて宿屋の登場の場面になりました。マリア様とヨセフ様が向こう側からやって来るのを見て、その宿屋の子はちゃんと台詞を言えました、「ここはいっぱい。あっちに行って」。先生は舞台袖で見ている、「ああ、よかったな」と思ってホッとしました。マリア様とヨセフ様が向こうに行く姿を見ながら、その男の子は、「でも」と言いました。想定しなかった台詞をその子が言ったので、先生はちょっとびっくりしました。男の子は続けました。「ここはダメだけど、ぼくのお部屋だったらいいよ」。そしたら、もう劇が続かなくなって、最後はもうイエス様が生まれたところに羊飼いや博士たちもやってきて、みんなで大団円っていうことになって終わったということです。

この話は、クリスマスがなんであるかを分かりやすく教えてくださいます。クリスマスは、人類へのプレゼントとして神様自らが人間の赤ちゃんになってこの世にやってきたことをお祝いする日です。神様のメッセージは、「与えることに大きな喜びがあるし、それが救いと関係がある」ということです。

でも、今の世界を眺めると、「与えることで救いなどが実現できるわけがない。救いとは手に入れることで実現する」と多くの人々が信じています。たとえば、「海の中にある海洋資源を手に入れたら幸せになる。それこそ救いだ」と考えている。他の国の領土を奪うこと、利権を手に入れること、人を蹴落としてでも自分が手に入れれば、それが幸せになるというのは人間の考える救いです。ところが神様が与える救いは人間の考える救いとは全く反対です。

考えてみれば、私たちは自分の力でこの世界に生まれたわけではありません。与えられて自分の存在がこの世に存在します。このように存在を与えられたのですから、人間は与えるときに大きな喜びを感じます。そして人間らしくなり

ます。与えるときに人間の救いは実現する。

今日の福音にはアウグストゥスという皇帝の名前が出てきます。彼は非常に名君だったそうです。彼の治世のときに平和の時代が長かったそうです。今風に言えば、安全保障の問題でも長い間実績がある。

彼は税金を手に入れるために住民登録を義務付けました。そして、それに従わないといけない立場で神様はこの世にやって来ました。人間の発想なら、神様がアウグストゥス以上の君主としてこの世にやってこられるときに救いが来ると思うものです。しかし、そうではありませんでした。神様は普通の人間として生まれ、社会の中の大きな力の中で右往左往している私たちでも救いをもたらすことができることを教えてください。私たちが与えるものは広い世界の中で非常に小さいことです。しかし、与えることは、偉大な神の救いと直結しています。「だから心配しないでください」というメッセージを私たちに与えてください。このように救いは、神様の素晴らしいものを頂くだけでなく、頂いたものを分かち合うときに救いが訪れます。

社会の中にいると、手に入れることに幸せを感じてしまいます。人の心の奥底にある「人から見捨てられたくない」という願望がそうさせるのかもしれませんが、しかし、与えることによって救いを実現する幼子の姿を見つめながら、救いの生き方を実践していくことができますように共に祈りましょう。